

複数のアメリカ

褐色の千年紀・三つの根^{アルケ}元形^{ルケ}・エキユメノポリス

ダビッド・カラスコ
David CARRASCO

「宗教研究における新たなトレンド」について、考えるところを20分で発表するよう求められた私は、即座にコンサイス・オックスフォード辞典をつまびき、「トレンド」なる語の定義について導きを求めた。「(出来事、流行、意見などの)一般的な方向および傾向」という定義は、私の考えの中では、第58回日本宗教学会学術大会、そして南山大学50周年記念、南山宗教文化研究所25周年記念のために望まれている意義をとらえるものではなかった。これらいくつかの数字、勝れた組織体、アカデミックな場の名前とテーマは、起源・始まり・過去の響き合いと軌道・未来・希望の精神を結びつけ、それによって私は、「トレンド」についてのもう一つの典拠となる本へと導かれた。M. エドモンソン著『イツァーの古代的未來：ティスイミンのチラム・バラムの本』である(チラム・バラムは「ジャガーのスポークスマン」の意)。この著作は、ユカタン半島マヤの歴史的・民族誌的情報(スペイン系クリスチャンの影響を被っている)の宝庫の翻訳であり、その背後には、未来がいかにして過去と解きたいまでにリンクしているかとのヴィジョンがはたらいっている。マヤの見方によれば、歴史、とくに未来へとつながりいくトレンドは、円環的反復の感覚によって、そして<暦の中の数字や記号の意味を読み取ることで祭司は予言し未来を読み そのトレンドを知り その開示にあずかることができる>との信仰によって方向づけられている。

私自身は、マヤ式の予言を実践するものではないが、宗教研究の新たな動向(=ト

レンド)は、過去に関する対話の中で、そして私の今日のねらいからすれば、近々の過去　たとえば、25, 50, 58, 99, (平成) 11という聖なる数字の時間枠の中で経験されるような過去　に関する対話の中で最もよく識別される、と確信している。本稿において、私は、新たな動向や軌道(少なくともアメリカ宗教の研究におけるそれら)は二つの力との関係において考察されねばならない、と論じたいと思う。すなわち、1)それぞれの動向が生起するところの^{アルケー}根元形の力、2)私が「褐色の千年紀(the Brown Millennium)」と呼ぶ、合衆国の社会と宗教のラテン化という大きな文化的動向、の二つである。

褐色の千年紀という語によって私が意味するのは、一つには、合衆国ではラテン系、ラテン・アメリカ系がアフリカ系アメリカ人を凌駕して、最大の、そして最も創造的なマイノリティーになっているという人口統計上の大きな推移である。お気づきだろうか。合衆国の20歳の学生のいずれの生涯においても、我々は、どのエスニック集団も(白人ヨーロッパ系も含め)合衆国国民のマジョリティーとなることがないような社会に生きることになるだろう。つまり、事実として、マイアミやロサンゼルスなどの都市では75%の人口が家庭において英語以外の言語を話しているのである。さらには、中南米のみならずアメリカ合衆国でもスペイン語のほうの方が長い期間にわたって話されてきたのであり、スペイン語はこれからも主要な公的言語であり続けるとの兆候ははっきりとしているのだ、とますます自覚されるようになってきているのである。そ

れは、アメリカの宗教、政治、音楽、食生活のラテン化にとどまるものではない。自分たちの神々、先祖、霊を祀り、それらを合衆国公式の宗教的現状と混ぜ合わせている、アフリカ、アジア、ラテンの人々のインパクトということでもあるのだ。

アメリカの中の複数のアメリカを成している人々と彼らの神々は、諸文化の全般的色合いを、無地の赤銅色、褐色へと変容させることだろう。宗教や文化を研究する者として我々が合衆国で向き合っている動向は、最近のCD、*Barrio Ritmos and Blues* (by Dr. Loco and the Rockin' Jalapeño Band)の中でよく述べられている。そこでは、サンフランシスコのミッション街に住んでいたが、死んで天国へと行ってしまったある人物の声で、こう歌い上げている。

私は天国にいる
私は天国にいる
ネアンデルタール人、サムライ、妻たちと
共に
私が死んだときに起こった、あの意識のほ
どけ
銃声は時間の中でとまったままだ
でも、生きていたころの私は誰だったのだ
ろう
男だったのか
女だったのか
おまわりだったのか
思い出せない
独り言をつぶやいた、私はアメリカ人だ
でもまさにその瞬間、私はこう言っていた
アメリカ人ってなんだ
思い出せない
天国の住人は若くて褐色だ

英語は話さない
アメリカ人はここにはほとんどいない
実際、ここでは皆が黒人かラテンか中国人
のようだった
だから私は考える、天国はまるで地球のよ
うだったんだ、
ミッション街は毎日どんどん天国みたいに
なっていたんだ、と

私がここで「褐色の千年王国」というのは、人口統計や言語上の変化以上のものである。世界の他の場所においても注目すべきトレンドであるかもしれず、しかも宗教と宗教的創造性の研究にインパクトを与える、褐色の千年紀の重要な動向とは、1) 美的想像力の再生化、2) 宗教的・人種の変化に関する論述、すなわち、習合と雑種性への不断の批判、3) 見えない都市、エキュメノポリス (the Ecumenopolis) の褐色化、の三つであるだろう。

私はまた、マヤの古代的未來という観念を想起して、アメリカの文化的・宗教的景観のそうした変容は、より深い根をもつものであり、部分的には三つの根元形に据え置かれている、と主張したいと思う。すなわち、宇宙的自然の根元形、植民地主義の根元形、都市の根元形である。根元形 (arché) という語によって私は、素朴に、「オリジナルの形」ということ、起源が構造と刷新に指示を出すということの意味している。より明細に言えば、本来的でしかも回帰的でもあるような、意味とシンボルの諸秩序ということである。そうした秩序は、我々の物質的、心的環境を次第に構成し、我々が形成したり、刷新したり、離れようとしたりするところのものの原料となる。

以下に、三つの根元形と、それから生起してきた新たな動向の外郭を描いてみよう。すなわち、

1. ミルチャ・エリアーデの、自然の宇宙的パターンの根元形。そして、L. サリヴァンの威厳あふれる著作『イカンチュの太鼓』におけるエリアーデのモデルの印象的な刷新。褐色の千年紀に関連し、サリヴァンが主張するところの一つの動向とは、南アメリカの諸宗教とあらゆる地での想像力あふれるアーティストらとの間での美的対話を通じてなされる、美的想像力の再生化である。
2. チャールズ・ロングの、植民地主義の新しい根元形。そして、W. B. テイラーの傑作『聖なるものの長官たち：18世紀メキシコの司祭と教区民』の中で示された、習合という概念化を越えようとする解釈上の動向。
3. I. カルヴィーノの、見えない都市の根元形。そして、P. ウィートリーが描き出す普遍都市としてのエキュメノポリスへと向かう世界規模の動向。エキュメノポリスの最も印象的な例のいくつかは、ロサンゼルス、サンフランシスコ、メキシコ・シティ、そしておそらくは東京などの辺境都市、つまりは褐色の千年紀のあらゆる都市の中に見出される。

これらの動向が意味するのは、解釈論の上で我々は、心地よい二元論から離れ、歴史・意味・象徴・権力のさまざまなニュアンス・スペクトル・色合いとの取り組みへと移りつつある、ということだ。このこと

は、ドイツの詩人P. ツェランが明晰に述べるとおりである。

語れ

ただしイエスとノーは分けないままにお

け

そして発言にはこの意味を与えよ

色合いを与えよ

我々は、我々の宗教、人種、文化の研究にもっと色合いを与えねばならないであろう。

宇宙的根元形

南アメリカの諸宗教を研究することは...例えば、ルター改革以後のヨーロッパのプロテスタント体験を研究することと類似している。(サリヴァン、5頁)

この一世紀のあいだ宗教研究に対しかつて巨大ではあったが今や衰退しつつある影響を与えてきた第一の「根元形」は、自然の「宇宙的根元形」である。これは、人間意識の内的秩序と人間の想像力の形式は、意識以外の何かしら 主として、世界の所与の自然的諸形態(空、大地、月、太陽、岩、木、水など) との厳密な相互関係から生じる、という観念である。この根元形の最も鮮明な表現としては、ミルチャ・エリアーデ『宗教学概論』、ジョセフ・キタガワ『日本史の中の宗教』、C. H. ロング『アルファ 創造神話』などがある。これらの作品の中ではいずれも、創造神話を介して解釈された自然の宇宙的パターンは、日常生活、倫理、性、子育て、戦闘など、およそ人生の全ての側面について思考するための背景を提供している。

このモデルを最も力強い仕方で刷新したのは、L. サリヴァン『イカンチュの太鼓 南アメリカの諸宗教における意味への方向づけ』である。複数のアメリカのうちの一つへと焦点を当てた、サリヴァンのこの仕事は、「宇宙的根元形」をバロック的に正当化すると同時に、それからの創造的な離反でもある。一千頁におよぶこの労作が取り上げる緊要の課題は、南アメリカの人々について大発見時代以降存続している歪んだイメージを批判すること、そしてより重要な仕事としては、広範囲にわたる南アメリカの人々の宗教的創造性と宗教的想像力を明らかにすること、である。彼は、トレンドィーな諸範疇としての地理学と言語は諸宗教の様々な意味を包括するには有効ではないとみなして、それらを巧みにはぐらかす。むしろ研究の焦点・方法としては神話と形態学に厳として寄って立つのである。彼は述べている。

歴史的環境と人間の一般的な宗教状況の間で道を拓こうとする我々にとって、神話こそがカギである。神話は、社会的、経済的、政治的秩序を形成し説明するだけではない。なによりもそれは、想像力そのもの、すなわち本質的に異なる諸経験を一つの想像的リアリティー 様々な関係、理解、感情、憶測、生殖、審判から成る一つの世界 へと引き入れる人間の能力を明らかにするのである。(18頁)

サリヴァンは宇宙論研究の伝統的諸範疇を用いてこの本を体系立てているわけだが、他方、この作品を慎重に読んでみると、著者が実際には、「イメージについての議論」

と呼ぶところの方法を用いて、想像力の根元形へと、すなわち、想像力が神話の創造において人間と世界の間の生き生きとした創造的関係性において果たす役割へと、新しい働きを与えるようにしているのが分かる。

神話は、それ自身のリアリティーを覽じ、それ自身の創造性の様々な源泉を測りとする想像力である。種々様々な創造性との関わり（植物から惑星にいたる生命、動物の多産、知性、アート）において、神話は、想像力の聖なる礎と宗教的性質を明らかにする。（22頁）

サリヴァンの、南アメリカ的想像力の根元形は、少なくとも二つの意味において革新的である。第一に、彼の主張は大胆な広がりをもった比較に基づいている。第二に、宗教研究者のための対話の焦点を先導している。これら二つの点は、南アメリカの諸宗教が宗教的想像の時代区分上の古代を映し出すとの考え方への批判に基づいている。暦、祝祭の暴力、火を内蔵した存在、音響イメージ、シャーマン、終末物語などを取り上げた彼の研究は、南アメリカ16世紀以降の人々、すなわち近代世界の勃興と並んで、それと相互に作用しつつ生きてきた人々の生・想像力を明らかにする。序文で述べられるように、『イカンチュの太鼓』は、「例えば、ルター改革以後のヨーロッパのプロテスタント体験を研究することと類似している」。

しかし、方法上の最も重要な動向は、ある新しい美的対話への全面的コミットメントである。『イカンチュの太鼓』は終始一貫

して、「南アメリカの宗教的生が文学、音楽、演劇、視覚デザインにとって価値ある主題・刺激であることを発見している」（4頁）創造的なアーティストたちへと差し向けられている。サリヴァンは、様々な神話におけるスピリチュアルな諸価値・諸パターンについての対話を、まずもって宗教研究者たちとの間でもちたいなどとは考えていない。むしろ、ミュージシャン、デザイナー、ダンサー、画家、作家 南アメリカ的創造性の宗教的文脈との美的相互作用によって新たにされるであろう、その種の人たちとコミュニケーションしようとする。B. フェイゲンが『イカンチュの太鼓』について述べたように、まさに「全てのページに宝石がちりばめられている」。

植民地主義の根元形

習合は、教え伝えることができる命題ではない。というのも、我々は、多様な諸伝統の創造的な混合に直面しているわけではなく、世界とそこにおける人間の位置の、おそろしく異質で明確化不可能な概念化に直面しているのだから。

「聖なるものへの複数の道 16世紀メキシコにおける《宗教》の再構築」I. クレインデン

ある一つの根元形に根差した第二の主要な動向は、宗教的变化の研究である。この分野で私が知っている最も重要な著作は、W. B. テイラー『聖なるものの長官たち 18世紀メキシコの司祭と教区民』である。植民地メキシコの宗教に関するこの著作が探究する問題は、宗教教義や信念の諸解釈

の競合、実践倫理と日常的ふるまいの諸問題、農村共同体における社会的・権威的関係の組織構造、そして、これらすべての事柄が時間や場所によって、また国家が制度化した複数の改革との関係の中で変化する様子など、広範におよぶ。この著作は、征服と植民地主義という中央メキシコの痛々しくも深遠な体験に関わる習合という範疇への批判においてローカルな宗教を問題化するという点において、理論的に大きな貢献をなしている。「習合を越えて」と題されたセクションでは、宗教的变化・過程を記述する機械的もしくは有機的メタファー

溶接、混合、融合、合成、合体、雑種化などが互換的でないと批判されている。この中で、テイラーは、I. クレンディンネンの研究を称賛する。

植民地支配下でローカルな諸宗教を保持するというインディアンの能力を解くカギとして聖なるものを経験する手法を提示する、ある独創的な論文の中で、I. クレンディンネンは、メソ・アメリカ研究において習合へと添付されたメタファー、混乱を引き起こすメタファーを避けている。彼女は、植民地中央メキシコのインディアンが自分たちのローカルな諸宗教を形作り、聖母マリアや聖なるアートの中の人間表現を「自分のものにする」一方で、キリスト教徒的形式とキリスト教徒であるとの観念を受容するのを見出す。信念としての宗教ではなく実践されたものとしての宗教に焦点を当てることで、そして、インディアンの「粗方の筋書きしか決まっていない」公的パフォーマンスを研究することで、クレンディン

ネンは、W. ワイズマンによる植民地彫刻の研究と類似の結論に至る。すなわち、様々な実践と信念は変化したものの、聖なるものを想念する習慣は持続した。中央メキシコのインディアンは、彼らにとっては馴染みのある、もしくは理解しやすくない一連のキリスト教的実践、ミサへの参加、鞭打による贖罪、巡礼、典礼的劇場、聖なる舞踊、そして他の形の敬虔なる身振り、の全体を受容した。しかしそれらは、司祭が礼儀正しく尊崇に値すると見なしていたものをはるかに越えるところに彼を連れて行くことになった。(テイラー 60頁；強調引用者)

習合を越えるものを評価するというこの動向は、別の根元形の研究から生じる。すなわち、宗教史家C. H. ロングが「植民地主義の新しい根元形」と呼ぶもの、15世紀の発見航海にはじまる植民地的、社会的、象徴的構築という世界規模での破壊プロセスである。『表意 宗教の解釈におけるサイン・象徴・像』においてロングは、宗教研究は啓蒙主義の子供であることを認め、さらに宗教学という分野のもう一人の親的存在も指摘する。近代の帝国主義、植民地主義である。人間の想像力の内的秩序は常にそれへと浸透する環境との相互作用の結果である、というエリアーデの主張に印象づけられたロングは、世界規模での侵略、暴力、征服、貿易を伴った発見航海の歴史を、人間の思考形成と宗教研究にとって新たな始元的構造・全体的環境となったものだとみなす。

...私は、宗教と人間意識の構築という問題を立てることにする。しかし、原初性

の場を探究するのではなく、むしろそうした場を、近代の帝国主義と植民地主義の時代に起こった、新しいヨーロッパ外文化、新しい重商主義、そしてそれらに引き続く諸関係の構築という時空間の中に設定することにしたい。(『ポスト植民地の宗教研究をめざして』)

ロングは、宗教の解釈者に対し、新しい立場をとるよう求めているのである。我々は、J. Z. スミスが論じたような意味での宗教を想像する新たな機会や、エリアーデが主張したような意味での解読されるべき偉大なる聖体顕示に直面しているだけなのではない。「隠匿の力学」、すなわち「植民地化されたもの、表意されたもの、我々の認識論の中の『他者』」が、遅れて、なおかつゆがんだ仕方で見られることの中に映し出された、「表意の歴史」にも直面しているのである。

隠匿の力学は言語的、象徴的、政治的歴史によって多層的であるがゆえに、そうした変化を解釈する者は、スラッシュと呼ばれるところのもの、つまり「原始的／文明的」という大いなる二分法の「間」の中にみずからを位置づけねばならない、とロングは主張する。このことを並々ならぬ勇氣をもって行い、創造的な結果を得た解釈者の一人として、メキシコ系アメリカ人のG. アンサルドゥアがいる。彼女のバイリンガルな著作『辺境』について、ある人はこう書いている。

アンサルドゥアの大いなる理論的貢献は、語られる対象としての雑種空間ではなく、そこから考えてくる場としての「間」を作り上げたことである。これは、ヒスパ

ニック系／ラテン系アメリカとアメリカ・インディアンとのポスト植民地主義理論の可能性の条件としての、ヒスパニック系／ラテン系アメリカとアメリカ・インディアンの遺産の、雑種的な考える場である。

見えない都市の根元形

宗教研究が向き合わねばならないであろう第三の、そして最もよく浸透した動向は、エキュメノポリスという、1967年にP. ウィートリーが予言したグローバル都市の出現である。というのも、美的対話、宗教的变化、様々な千年紀が実際に表れてくるのは、未来の見えざる都市の全体的環境の内側においてであるからだ。「象徴としての都市」の中でウィートリーは、我々が生きている時代は、二つの都市化サイクル　5千年以上前に始まった都市革命と18世紀の産業革命　が終焉をむかえ、これから一つになって普遍都市へと溶け込むという意味で、都市の歴史が頂点に達しようとする時代なのだ、と述べる。彼はこう書いている。

いまや都市化の度合いは、産業化した諸共同体においては下降する傾向にあり、低開発国では加速しつつある。こういったなか我々は、全ての人々が都市によって生きるだけでなく、都市住民が多かれ少なかれ地域人口の密度にしたがって再び分散される時代へと近づきつつあるのだ。21世紀末までに普遍都市、エキュメノポリスが、位階的に秩序づけられた都市形態　そこでは、農村的景観の広がり、単に人間の生存にとって必要なものとしてのみ囲い込まれている　の世界規模のネットワークを包摂するよう

になるのは、避けられないように思われる。(ウィートリー 1-2頁)

エキュメノポリスに言及するとき、私は、見えざる都市という用語を用いる。というのも、私の見方によれば、宗教研究者は、形態学、歴史学、ポスト・モダニズム、象徴論のいずれに関わっているにせよ、あまりにもしばしば、記念性(諸観念、個人崇拜、建物における)、社会的階層構造(社会秩序、パンテオン、哲学における)、制御能力(情報、運輸、コミュニケーション、シンボリズムの)などを特徴とする都市生活の、浸透性があり止むことのない影響力を無視しているからだ。都市は我々の研究対象すべての文脈ではないのだが、最も浸透性の強い社会的・象徴的文脈ではあるのだ。宗教的・政治的方向性を提供する都市の力について、ウィートリーは次のように述べている。

都市的形態を排除した上での農民社会にのみ焦点をおく地域研究者は、他の個所でも述べたように、プラトンの(別の意味では、ベケットの)囚人 壁の上にゆらめく影をリアリティーと取り違えたと同じように惑わされている。彼らはまた、エコロジカルな変容の産出力に背を向け、社会変化という大波の原因を歴史の浜辺の上、さざなみの中に捜し求めている。(ウィートリー 8頁)

しかし、都市という事実 これまで人間が作りあげた根元形があるとしたら、実際、都市こそは人間の根元形である は、宗教研究者によってひどく無視されてきた。せいぜいI.カルヴィーノが『見えない都市』

と題した本を出したぐらいのものである。マルコ・ポーロによるフビライ・ハーンの都市帝国への旅を想像上でたどる中で、カルヴィーノは、都市の根元形とは何であり、何をするものなのか、簡潔に述べている。都市は、他のどんな場所、器物、あるいは「自然」以上に、地上における方向づけの最も深い感覚を人間に与える。方向づけとはすなわち、人間の生を世界の中に位置づける根本的過程を意味する。宗教的諸次元をもち、人間を実在一般へ、個別的には聖なるものへと方向づける仕方で、都市は、人間の位置を実在の中に固定するのである。いかなる帝国の都市であっても、それは物理的な力であると同様、形而上学的な力でもある、とカルヴィーノは論じる。というのも、一方で、都市は我々の心の中に住み着く カルヴィーノの言葉で言えば「あなたが考えるべきすべてのことは都市が語る」 がゆえに、余剰・反復・再創造の力をもつのであるから。とくにあのいくつかの大首都において、都市は、あなたが自分自身のことを想像していると考えているときにも、実は「あなたに都市の物語を繰り返させる」あらゆる不思議の総体となる。しかし他方、そうした繰り返しによっても、新しい意味を再創造する都市の力、あるいは、新しい意味や物語や力をまとめあげる道を開く都市の力は消耗させられることはない。というのも、あらゆる原初的なもの、原型、理念型と同様、論述することもまた、全体を作り上げる各部分に及ばないからである。都市の象徴、人々、聖域、行進をどれだけ反復し読解したところで、真の意味での都市の発見はなされないままだ

ろう。「都市」の諸側面のいくつかは、我々には見えないまま、意識されないままにとどまるだろう。

複数のアメリカに対して最も影響力のある都市は、褐色の千年紀の都市、すなわち、美的な語り口と宗教的变化のペースとが、ラテン系やアジア系の想像力、音楽、食生活、神々、儀礼によって充満されるような都市であるだろう。ラテン系、アジア系の人々は、これまであまりに頻繁に、空間的に言えば、辺境、フロンティア、へり、文化分析の「間」へと追放されてきたのである。

いまや辺境は再び、スペイン語、ポルトガル語、クレオール諸語、アジアの諸言語、食事、文学、アート、家族構成、宗教的信仰、想像、性的熱情、音楽的熱狂、神話、運動選手、理念などとして、北へ、東へ、西へと動き出している。私が語っているところの真の辺境とは、都市のことである。大いなる言語的、社会的、人種的な辺境であるロサンゼルス、あるいは、「その良いところは、合衆国と非常に近接しているところだ」といわれたニューヨークなどがそうだ。プエルトリコの文化批評家、A. D. キニョーネスは近著『壊れた記憶』の中で、ニューヨークがここ百年以上にわたってカリブ海の都市でありつづけていることを示している。J. マルティ、C. クルス、E. M. デ・オストス、マチト、T. ロドリゲスといったカリブ人によって祝福された都市。そして今や我々は、ボンバやプレーナやサルサといった音楽を、オハイオ州ローレンからコネチカット州ハートフォードに至る、あるいはパース・アンボイからハワイに至るあらゆるプエルトリコ系移民の町の

中で耳にする。端に位置する都市マイアミ、空中都市デンバー、痛みの海に浮かぶ都市サン・ホアン、スペイン語通用地域ミッション街とドクター・ロッコ・アンド・ザ・ロッキン・ハラペーニョ・バンドの都市サンフランシスコ。これらラテンの諸都市。

宗教研究の新たな動向と都市について私が論じていることは、すなわち、エリアーデが宇宙的根元形について、ロングが植民地的根元形についてそれぞれ行った主張は、拡大され、社会と人間的想像力を形成する都市の歴史と力に対して試されねばならない、ということである。人類の最も強力な器物としての都市は、人間の思考と文化を(再)方向づけする。褐色の千年紀のエキュメノポリスは、今後、我々の研究に対してより大きな影響力をもつことになる、と我々は想像できる。本稿の枠組みからすれば、エリアーデが感得しサリヴァンが論じた自然の諸パターンは、始まりの根元形を構成する。ロングの洞察が示唆するのは、西洋の終わりの根元形である。しかし、可視・不可視の実体をともなった都市は、人間の思考と宗教的実践の中心の根元形を構成するのである。

カルヴィーノ著『見えない都市』の中で、旅人マルコ・ポーロは、数々の言葉・大げさな仕草・複雑なサイン・不思議なわざなどによって、支配者でありホストでもあるフビライ・ハーンに対し、彼の帝国の性質を示そうとする。カルヴィーノは述べる。「フビライ・ハーンは、マルコ・ポーロがその長い旅の途上で訪れた数々の都市の描写として語る全てのことを、必ずしも信じたわけではなかった。しかしかのタタールの

皇帝は、彼が召し抱えていたいずれの使者や探検家に対するよりも、より大きな関心と好奇心をもって、あの若きヴェネチア人の話に耳を傾けつづる。私は、自分がなにかマルコ・ポーロ的なことを、皆さんに対して、すなわちフビライ・ハーンとしての日本宗教学会に対して行っているのだと承知している。だから、皆さんが宗教研究の新たな動向の性質について私が探究し・語る全てのことを信じてくれるなどは、期待していない。しかし、これら三つの根元形と、美的対話の革新、宗教的变化についての批判、褐色の千年紀のエキュメノポリスという見えない都市に対しては、あの物語の皇帝のように、皆さんが多大な関心を払ってくれるよう、願うものである。

文献

Italo Calvino, *Invisible Cities* (New York:

Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1972).

Inga Clendinnen, "Ways to the Sacred: Reconstructing 'Religion' in Sixteenth-Century Mexico," *History and Anthropology*, 5(1990): 105–41.

Charles H. Long, *Significations: Signs, Symbols and Images in the Interpretation of Religion* (Aurora, Colorado: The Davies Group, 1999).

Lawrence E. Sullivan, *Icanchu's Drum: An Orientation to Meaning in South American Religions* (New York: Macmillan, 1988).

William B. Taylor, *Magistrates of the Sacred: Priest and Parishioners in Eighteenth-Century Mexico* (Stanford: Stanford University Press, 1996).

Paul Wheatley, *City as Symbol* (London, 1967).

(翻訳 : 近藤光博)